

水道の将来を 考える



今回は、三島市の上水道の水源と水道管について、水道課梅原宏副技監に話を聞きました。

三島市の水源

——三島市で飲まれている水は、どこから来る水なのでしょう。

市の上水道は、裾野市にあり市が所有する伊豆島田浄水場と、清水町にあり県企業局が所有する駿豆水道の2つの水源から、市内に供給しています。前者は浄水場に井戸を設置し、地下60mからくみ上げています。後者は清水町の柿田川湧水を水源としています。どちらも富士山へ降った雨や雪が、長い年月をかけて地下水として到達したものです。



▲水道課・梅原宏副技監

——富士山の恵みというわけですね。1日どれくらいの量が供給されているのですか。

2つの水源から市内への平成27年の1日の平均配水量は、合計4万1千788m³です。この量は500mlのペットボトルに換算すると、8千万本を超える本数分に相当します。

——そんな量のペットボトルを見ることがないので、イメージがわかりませんが、とても多いんですね。

地域による水源の違い

——それぞれの水源の水は、どの地域に供給されているのですか。

水源別の市内の供給区域は図のとおりです。各々の水源の配水区域は、おおむね国道1号と主要地方道三島富士線の北側区域が伊豆島田浄水場の水を、南側区域と錦田・坂地区が駿豆水道の水を供給しています。この境界線付近は、



どちらの水も混ざって供給されています。

水が家庭に届けられるまで

——水はどのように水源から家庭へ届けられているのですか。

両水源から市内の各世帯・事業所などへお届けするため、平成28年3月末時点で送水管(※1)と配水管(※2)が合計392km整備されています。この距離は東海道新幹線に置き換えると、三島駅から京都駅までに相当します。

※1 浄水場から配水場(タンク)へ配水する大口径の管

※2 配水場から各家庭・事業所などへ配水する管

——前回、水道管路が老朽化しているという話でしたが。

現在、「三島市水道ビジョン(改定版)」に基づき、配水場など主要施設の耐震化のほか、口径が50cmを超える基幹管路の耐震化や漏水、さびの混入である

赤水の対策を中心
に、老朽管の更新を進めて
います。



▲伊豆島田浄水場

水道事業説明会を開催します

とき	ところ
9月16日(金)	錦田公民館
9月23日(金)	社会福祉会館※市営中央駐車場をご利用ください。
9月27日(火)	北上文化プラザ
9月30日(金)	中郷文化プラザ
各日午後7時～8時 ※申し込み不要、直接会場へ。 いずれも内容は同じです。	



内容 市の水道事業の歴史、経営や施設の状況など※なるべく公共交通機関をご利用ください。

幸原簡易水道をご利用の皆さんへ

広報みしま8月1日号に掲載したとおり、幸原簡易水道を市の上水道に統合します。料金の支払い先が変わりますので、ご確認ください。

検針 偶数月の1～5日ごろ

請求 12月検針分(10・11月利用分)より三島市からの請求になります。

※すでに対象世帯には、統合に関する説明書を配布しています。そのほかに不明点がありましたら、水道課までお問い合わせください。

次回は、市の水道事業の経営状況について、広報みしま10月1日号に掲載します。
問合せ 水道課 (☎98332657)

英雄危機一髪!! 一頼朝奮闘伝説一

鎌倉幕府が編さんした歴史書『吾妻鏡』によれば、のちに伊東祐親は富士川の戦いで敗れて頼朝に囚われ、頼朝から恩赦があったにもかかわらず、以前の行いを恥じると言い残し自害したそうです。

郷土資料館で九月二十二日(木・祝)まで開催の企画展「源頼朝と伊豆」に関連して、前回に引き続き頼朝伝説の地を紹介します。

前回は、頼朝の休憩にまつわる伝説をご紹介しました。今回は、三嶋大社参詣の途上で起こったとされる、頼朝の「危機一髪」伝説をご紹介します。

頼朝の伝承は伊豆一円に広く残されており、伊東市には若き日の頼朝の悲恋と命の危機が伝えられています。『曾我物語』によると、

頼朝は伊東を治めていた豪族・伊東祐親の娘、八重姫と恋仲になり、千鶴という男の子が生まれましました。しかし流人である頼朝と娘の結婚を認めなかった祐親によって、八重姫は他家へ嫁がされ、千鶴も殺害されてしまいました。頼朝も祐親に命を狙われますが、祐親の子・祐清が頼朝に父の殺害計画を密告したため、伊豆山神社に逃げて危機を脱しました。

三島市内にも、頼朝が三嶋大社参詣の途上でも危機に見舞われたという伝承があることを、広報みしま七月一日号の本欄で紹介しました(手無地藏堂、妻塚観音堂)。

さらに頼朝は三嶋大社の境内でも、「危機一髪」伝説を残しています。頼朝が大社へ参詣したある日、背後に怪物が現れたため切りつけたところ、あとには刀傷を負った牛のような形の石が残っていた、という伝承があります。この石が、社務所前の牛石です。

帰路についても頼朝の奮闘は続きます。ある夜の大神参詣の帰り道、現在の函南町問宮のあたりで大雨に遭いました。狩野川まで来ましたが橋が流され困っていたところ、一本の丸太が流れ着いたといわれています。そこで念仏を唱えながら急ぎ丸太を渡って向こう岸までたどり着き、振り返ると丸太は大蛇となって濁流を流れていった、という伝承があります。この伝承

は、来光川に架かる国道一三六号の蛇ヶ橋(写真)にまつわるものです。物の怪から暗殺者まで、頼朝の伊豆生活には危機が満載です。これだけ奮闘しては、いかに頼朝といえど、休憩をはさみたくなるのもわかる気がしますね。

頼朝にまつわる史跡・伝承は、郷土資料館で開催中の企画展「源頼朝と伊豆―史跡と伝承―」でもたっぷりご紹介しています。迫力ある浮世絵、市内に伝わる頼朝像、当時の生活が垣間見える出土遺物など、関連資料も合わせて展示しています。

郷土資料館で史跡・伝承に触れ、ゆつたりとした時間をお過ごしください。お待ちしております。

頼朝にまつわる史跡・伝承は、郷土資料館で開催中の企画展「源頼朝と伊豆―史跡と伝承―」でもたっぷりご紹介しています。迫力ある浮世絵、市内に伝わる頼朝像、当時の生活が垣間見える出土遺物など、関連資料も合わせて展示しています。

郷土資料館で史跡・伝承に触れ、ゆつたりとした時間をお過ごしください。お待ちしております。

頼朝にまつわる史跡・伝承は、郷土資料館で開催中の企画展「源頼朝と伊豆―史跡と伝承―」でもたっぷりご紹介しています。迫力ある浮世絵、市内に伝わる頼朝像、当時の生活が垣間見える出土遺物など、関連資料も合わせて展示しています。



三島の村名⑧

鶴喰―その一― (中郷地区)

この珍しい名前の集落は国道一号の南、御殿川中流域にあります。古老の話では、源頼朝がここへ来たとき、たくさんの鶴が餌を取っていたのを見て名付けられたとのことでした。

古くは青木、新谷、八反畑、藤代町を含めた広い範囲が鶴喰郷と呼ばれ、青木御嶽神社の古い棟札にも「鶴喰郷青木」と記されています。建武元年(一三三四)足利尊氏の文書に「鶴喰」の文字が見え、三嶋大社領であったことがわかります(三嶋大社文書)。

源氏とは縁の深い土地柄で、八幡神社が祀られており、毎月十四日の夜は婦人や老人が集い「おこもり」を行っていました。また、臨済宗周福寺は、源頼朝がまどろみの松の下の草堂を、鎌倉時代初期に鶴喰へ移したものと伝えられています。

戦前は十二軒と小さな農村集落でしたが、近年は住宅地が造成され、急激に人口が増加しています。



▲八幡神社(鶴喰)

▲写真：現在の蛇ヶ橋